

6. おわりに

道東近海が北太平洋の貝類相を反映していることに異論はないだろう。緯度のスケールよりも海流の影響が大であるらしいことは、化石の証拠からもわかる。例えば、十勝太の海食崖露頭の貝化石中には、寒流系現存種と暖流系のウネナシトマヤガイやサルボウが共存していた（十勝の自然史研究会編、1983）。一方、大陸沿岸性貝類のアサリやヒメシトリ等は内海や湾に広く分布しており、緯度や寒暖流のみで説明しきれない。寒流の貝を知るには、暖流との関連から、生態研究も含めた同属亜種間の詳細な対比が大切と思われる。

近年、水産資源として重要になったクビレバイ、アヤボラ、エゾボラは、水揚げ量が急増している一方で、個体数の減少と小型化が話題になりつつ

あると聞いている。また大陸棚最深底で、真っ白い巻き貝が捕獲されるらしい。これからも一層関心を持ち続けるつもりである。

（千葉県松戸市立六実中学校教諭）

引用文献

- 渡部忠重・伊藤潔（1965）貝類図鑑vol.1-1
 ———・小菅貞男（1967）貝、3
 桜井欽一・千葉蘭児（1969）VENUS vol.1-28
 No.2 P99~100
 K.M.CHANG（1974）Bull.chin.Malacol.soc,1 P21~30
 渡部忠重（1978）自然科学と博物館 vol.45 No.2
 P58~63
 十勝の自然史研究会（1983）十勝の自然を歩く、
 3 P153~154

浦幌町の近世史料（覚書）

後 藤 秀 彦

これまで、浦幌町の歴史を語るとき、明治以降のいわゆる「開拓時代」を起点として、その後の歴史を語るということが多かった。浦幌町の比較のまとまった『浦幌村五十年沿革史』（間宮、1947）や『浦幌町史』（山口、1971）を見ても、その発刊意図にもよって、開拓期以降の記述に力点が置かれ、それ以前の事象についてはわずかに記載されているにすぎないのが現実である。

もとより、人間の歴史というものは、人間がその土地に居住を始めたときから現在までを大局的に見る必要があり、歴史学もすべての人間の歩みをその研究対象とすべきものである。かかる観点からすると開拓期（この名称も適切ではないが）以前の歴史を捨象するという姿勢は正さなければならない。その土地に人間が住み始めたという事象を的確に把握して、その歩みを真摯に見つめなおす必要があるだろう。

浦幌町においては、縄文早期（現時点においては旧石器時代の遺跡は発見されていない）から人間が居住を始めており、そこから現在に至るまで

の悠久の歴史を研究の対象とすべきであり、かかる観点なくしては歴史学の成立はありえない。

これまで、浦幌町の歴史についての研究は、主に先史時代の遺跡・遺物やチャシ跡について考古学的な側面からなされ、道内外の数多くの研究者によって多くの業績を残してきたことは大きな成果である。これは、本町が北海道の南東岸に位置し、十勝川という大河を擁しており、各時代の遺跡や豊富な出土遺物の様相にも起因している。

また、開拓期の街並みの形成状況（君、1958）や浦幌炭礦の状況（寺島、1974）についても研究者の触れているところである。

この小文においては、中～近世の浦幌町の様相を述べるのがその目的であるが、現実的には中世に属する史料は皆無であり、近世についても17世紀中葉以降のものが大部分である。そうした意味においては17世紀中葉から19世紀中葉までのおよそ200年間にわたる記述をここですることとなるが、この200年余の期間にしても史料数は断片的であり、旅行記や日誌類などが中心的な史料と

なることは避けられない。

さて、この浦幌町にも十勝地域にも最もゆかりの深い「トカチ」の地名は、1635（寛永12）年の「戸賀知」が初出であろう（松前旧事記）。ここでは、戸賀知・運別、産金の業を興すとあり、砂金生産地として記載されている。運別は現在の様似町、戸賀知は現在の大樹町相保島付近または紋別川上流の地と考えられており、現在も採金跡が残されている。

浦幌町に関連のある「トカチ」が登場するのは1643（寛永20）年のことである。それは、金銀島探險のため日本近海を航行中、八丈島付近で遭難し、蝦夷沖へ漂着したオランダ東インド会社のカストリクム号司令官マールテン・ゲリッセン・ド・フリースの『日本旅行記』や船員の証言である（児玉、1971・北構、1983）。この報告は17世紀中葉の蝦夷地の様相を伝えるものとして著名であるが、浦幌町関係分を要約すると次のようになる。

6月9日午後3・4時ころ、ここでの土地最初の舟が本船を訪れたが、その中には2人の男と1男児が乗っていた。彼らは身体にたくさんの銀を帯びていて、我々に銀が豊富にあるという山々をさし示した。舟には大鹿の皮2枚と若干の干鮭があり、身には麻の粗衣とその上に毛皮衣をまとい、2人は互に孔をあけて紐を下げ、1人は金と銅が混った耳輪を下げていた。また、弓と矢を持ち、腰には銀作りの柄の刀子と銀装の腰刀を下げていた。彼らは金と銀のことをよく知っていた。また、自分たちの矢がよくできていることを自慢していたが、そのうちの若干のものには毒が塗られてあった。彼らの小舟は前端と後端が扁平になっており、櫂は幅狭いものであった。彼らはカストリクムの甲板に来るといろんなことを言っていたが、その中で「タンバコ」という言葉だけがわかった。そして、司令官に大鹿の皮1枚と塩をしていない干鮭をくれた。この民族は身体はズングリしており、皮膚は褐色であり、黒い粗剛な鬚があり、全身には毛がたくさん生えて黒くなっていた。また頭の前半は剃っており、後半の頭髪は長く垂れ下っていた。フリースはこの地方のことについて尋ねたが、蝦夷人は西徼北を指してそこに彼らが住むといい、これをタカプチャーTacaptie（トカチ）と呼び、また急峻な岬をグローンGroen（エリモ）、河の注ぎ湾をグウチャルGouts

aer（クッシャロ）、さらにまた北東の方向にシラルカCyrarca（シラヌカ）およびグウチオテGoutsio（クシロ？）というところがあるなどと答えた。甲板上ではタバコとアラク酒でもてなしたが、酒を飲むときには指で口鬚を上げた。とにかく非常によい機嫌で帰って行った。

また、同船の乗組員の供述記録と思われるものの中には、「エゾ島には、次に挙げるような人口の多い集落がある。マツメイ、シラルカ、トカプチャー、クチュリ、グローエン、アッケリス、ウビツ、ポロビツ、ソボッサリ、クローエン、ウチョイラ、エサン、シロカニ、しかし、これらの集落あるいは町は、クチュリの住民によれば、次のように呼ばれている。マトメイ、コンプソ、バスクル、ハーペ、トカプチャー、アブネイ、サンベツ、ウビツ、クローエン、シラルカ、サロ、クチュリ、アッケイス」とある。

これらの記事中、「タカプチャー」または「トカプチャー」とあるのが、十勝川河口集落のトカチ（プト）であり、「アブネイ」とあるのが「厚内」であり、この記録が浦幌町の様子を伝える最初の記事である。また、このトカチの地名は1644（正保元）年の『正保日本図』に「トカチ」、1697（元禄10）年の『元禄国絵図』にも「とかち」とあって、十勝管内でも最も古い地名となっている。同様に、1712（正徳2）年の『和漢三才図絵』に「ホロイツミ、エレモ岬、ウンベツ、エレモ、サウヤ、トマリ、トカチ、シラヌカ、クスリ」、1720（享保5）年の新井白石の『蝦夷志』にも東蝦夷地54のコタンの一つとして「トカチ」が挙げられている。

また、1669（寛文9）年のシャクシャインの一斉蜂起では、とかちで17人の和人が殺され、「しふちやりより奥狄罷有候所」として「とかち」の名が記録され、さらに「大とかち 川有 狄おとなシリテシ 家十軒」との記述が見える（津軽・統志）。このトカチでは17人もの和人が殺されているが、これは寛文年間にトカチ場所が当地に開設されたことを推測させるものである。商場は十勝アイヌの拠点、集結地として重要であり、さらに松前からの交易船の都合のよい地点が選択された可能性が強く、また場所名として「トカチ」を冠していることから十勝川河口集落のトカチであった可能性を完全に払拭することはできず、後年

トマリ（広尾）へ移転したとも考えられる。また、『津軽一統志』の巻十では「松前より下狄地所付」として、とまり、とかち、せう屋、ゑるも崎、大とかちの地名が列挙され、さらに「三石より三里程下よりとかちの内の由。浦川 ほろへち ほろいつみ ゑるもの崎 とまり とかち」とあって、「とまり」と「とかち」・「大とかち」は区別して使用されており、前述の内容を支持しているようにも見える。

このトカチ場所の様子について、1726（享保11）年ごろの『蝦夷商買問書』では次のように記している。

「トカチト申所、蟻崎内蔵丞殿御預り、出物干鮭名物也。大川ニテ水上広シ。蝦夷大勢（ワ）ハシノ羽名物、塩鶴沢山、鹿皮熊皮類沢山ニ出ル。荷積り五百石位ナレトモ、能物出ル所成故、運上金高直年々不同」。

前記の「大とかち」の地名は、1789（寛政元）年に起きたクナシリ・メナシアイヌの一斉蜂起の際の『寛文拾年狄蜂起集書』にも「一、大とかち

家十間程間川有 おとなしりこし」と見え、家屋数も同数の10軒が記録されている。「しりこし」は、前記の「シリテシ」と同一人物で、当地の乙名の名であろう。同事件を扱った1789（寛政元）年の『寛政蝦夷乱取調日記』には、「とかち」のほか「こふから石」の地名も見える。このうちトカチについては、とかちのシャムクシテが手印としてエモシボ壹振（竿添）を差し出したこと、あつけしのイニンカリととかちのシャムクシテが喧嘩したこと、クシウバク・チャルシマ・カネムシの3人の長人をとかちから召連れたことが記録されている。また、「これから石」については、おほつないからこふから石に向けて立火をしたことが記され、こふから石について「崎々陰に夷家共に有レ之候」と記述している。

18世紀後半に入るとロシアは南下政策により、度々蝦夷地に来航するようになった。そして、時には貿易を求めるなどしたため幕府は蝦夷地調査のため幕吏などを派遣するようになった。1798（寛政10）年、最上徳内らと当地を訪れた木村謙次は『蝦夷日記』の中で次のように記述している。

「番小やより下り舟凡三四丁渡し場五十間程中ニ洲アリ 凡半里ほと有テ戸掘川舟渡し場百間ほと東夷第一大川西石狩ヲ男トシ東戸掘ヲ女トス」

カフ乳 ショケベ ショケ橋ト 沢川 薩摩五支ト コフカライシ 昆布トル処ト 訳 古昔家アリ今絶タリ通事世話シテサメ取小や（コ） ウリ、ヤニ岨夏鷄ヲトルト 訳 ヲユツヘ（コ） 小川トハハネルト 此間汐時ニテ通行難所岩ヲニヲフ（コ） アツフナイ（コ） 昼休（コ） ヲカシナイ（コ） ホコイ（コ） ヲトンベ（コ） シンクラルハナイ（コ） 昔死人ニ手向スル処ト 訳 無名川一チュクヘツ（コ） 秋ノ川ト 訳。

ここでは、コフカライシに昔、家が在ったこと、烽火台があること、アツフナイに昼休小屋があることなどが知れる。

1799（寛政11）年、幕府は東蝦夷地を直轄地とし、各地に会所を設置して沿岸警備の態勢を固めた。当地内のコフカライシに前記のような烽火台を設け、非常用の烽火を用意したのもこのためである。

同1799（寛政11）年、幕府蝦夷地御用掛筆頭松平忠明は画家谷元旦那を従え東蝦夷地を踏査した。翌1800（寛政12）年には勇払屯田の八王子千人同心原新助に十勝・日高・胆振・石狩の内陸調査を命じた。この調査を実際に行った配下の皆川周太夫は、大津から十勝川筋をさかのぼり日高へ入ったが、後日『戸勝川海岸ヨリ沙留川海岸迄、御開発御入用積書付』と題する報告書を松平忠明に提出した。この中で周太夫は十勝川河口から沙流川河口に至る開発計画を上申し、十勝～日高をつなぐ延長60余里の幹線道路を開削し、大津川を締切って十勝川に河口港を建設することを提唱している。そして、この完成には工夫3万6百人、工費1,043両、工期6カ月が必要としている。

また、翌1801（享和元）年には松平忠明ら4人の蝦夷地御用掛も『箱館蝦夷地廉々之儀申上候書付』を提出し、18項目の意見を述べているが、この中でも大津川をせき止めて水運の便に供するという周太夫と同様の提案をしている。

この画案は実現には至らなかったが、後年、松浦武四郎も『東蝦夷日誌』の中で「若此川口をしてヲホツナイの方を閉て一口となす時は、トカチの川口水勢倍して頗る大船を容る湊となるべく思はる」と述べ、さらに下って1901（明治34）年には大津・帯広・藻岩・生剛・止若・函館などの有志が「北海道十勝河港修築期成会」を結成して、請願運動などを実施したこともあったが、実現しなかった（小林、1960）。

19世紀に入ると史料数もわずかつづではあるが多くなっていく。

1802(享和2)年ごろの作と思われる『東案内記』には「ヲコシ^(ツ)へ(番屋) 此所番や有、高山の影にて甚難処の路也」とあるし、1808(文化5)年の児山紀成の『蝦夷日記』には「(3月)七日 けふもよし。風も追手にてゆく。申ばかり江里茂の沖を過て、戸勝なたにいたる。こゝも七十里あまりの沖なりとぞ。…(中略)…(8月)八日 …君は蝦夷の馬にて乗てとくはせ給へば、人みなおくれぬ。山陰にたかき巖海の中へさし出たる所おほかり。山はいとさかしき所にてゆかれず。海をおよかせてわたり給へり。いかにはげしかりけん。蝦夷か弓に造る於武湖といふ木の強きむちさへおれぬ。人々は岩を伝い、或は浪をわたり、命たにと念しつゝ、皆つゝ、かなくわたりぬ。調度もたぬ島人は、さかしき山路を越たり。からうして緒古豆閉^{オコッペ}の番屋に入てかれひたうへ、蓑笠もぐしたり。猶海辺行。戸勝川は東蝦夷の大河なり。怪しき蝦夷船にてわたるもあやふし。鯨鮫は、はやうわたりし風連の川上と、此戸勝川とに限りりとぞ」とあり、オコッペに番屋があったこと、その付近の通行が不便であったことなどが紹介されている。

1808(文化5)年の『東蝦夷地各場所様子大概書』には、ヲコッペ・コブカライシ・とかち・うらほろ・へつちやろなどの地名が見え、『戸勝場所大概書』にはヲコッペへの記事として、昼休所 壱ヶ所 梁間九尺 桁間四間、同草小屋 壱ヶ所とあり、「是は当秋諸向帰郷通行多に付、新規取建候分」となっている。また、馬船1艘が戸勝に、コブカライシに非常用の烽火が備えられ、「蝦夷小屋ありて蝦夷住居」として、「とかち・あしりこたん・うらほろ・へつちやろ・たんさの・をたうしべつ」などのコタン名が挙げられており、ヲコッペへの充実ぶりが窺われる。

1824(文政7)年の上原熊次郎著『蝦夷地名考并里程記』では、トカチ、ヲコッペ、チュクベツの地名が見られ、トカチには小休所のあることが記載されている。

また、これより先1805(文化2)年には幕命によりクマネ平(ヒラ)・昆布刈石・オコッペの3カ所に新道を開削し、旅行者の便を図った。

下って、1850(嘉永3)年のトカチ場所中、本

町分の施設状況を見ると、昼休所がオシラヘツ・モンベツ・ユートなどとともにオコッペに、小休所がヒホロ・ラッコ・アエホシマ・オンネナイ・チヨフシなどとともにトカチに設けられ、オコッペには非常用幕串・松明・草鞋が備えられた。

また、1854(安政元)年ごろの帰俗土人としてトカチ村の石松(20歳)・三之助(17歳)・惣吉(15歳)・由蔵(14歳)・歌吉(12歳)、タンネヲタ村の市蔵(17歳)の名が知られている。

同じころの1856(安政3)年の窪田子蔵『協和使役』には「(8月)廿五日 シャクベツを発す。西の方荒原を行きシャクベツ川を騎渡す。海岸を行く一里ならず、又荒原に入る。チュクベツ川を渡る。舟渡なり。此をクスリ、トカチの境とす。又ヲトンベ、アブナイ、ヲニヲフの三流を騎渡す。皆小流なり。是所より山路に入る。頗る峻なり。此日小雨。東風油衣を吹き笠を飄がえす。ヲコチベ川を渡り午餉。又ヲコチベ川を渡る。二派一源なり。又コンポガルシ、タマネビラ二小流を渡る。海岸山崩れ行くべからず。又山路に上る。亦険なり。山を下りトカチ川を渡る。トカチ川東道の大河なり。源二脉あり」とあり、海岸線に点在する地名をよく拾っている。

また、同年の『トカチ場所支配人通詞番人稼方名前書』には番屋がトウフキ・オホツナイに、昼休所がユート・オコッペに、小休所がチヨフシ・トカチに在ったことが記されている。

さらに、松浦武四郎の1856(安政3)年の『竹四郎回浦日記』と翌1857(安政4)年の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』は詳細を極めている。

まず『竹四郎回浦日記』巻の二十六では次のように記述している。

チュクベツ

川有、巾十余間、刳木船にて渡す。此処クスリ・トカチ両持にして、隔年に渡し守を出す。一ヶ月給代六百文のよし、川向に夷家二軒有。両川岸に標柱を建たり(東クスリ領 西トカチ領)。扱風波なく時は是より浜を行に宜敷、今日は風有て波が故に我々は是より陸通り十丁斗にして下り、此河源クスリ・トカチの境目より来ると。魚類 鮭・鱒・鮠・桃花魚・雑喉のみなりと。

ヘサンナイ 此所へ下る。

ヲトンヘ 崖

アブナイ 小川

此処にも昔し夷家六軒有し由、当時一軒もなし。
トカチ詰小森七郎兵衛迎に出る。クスリ詰腰山某
此所より引取る。

ヲニヲウ

此所よりまた山に懸り、是も風波穏なる時は下道
行によろしと。此辺も文化丑年に始て切開に相成。

ヲコッヘ え下る。

砂浜、小流有。此処昼休所一軒（二十坪）有。惣
て此辺南向也。扱此処の昼飯はトカチ領なれ共、
上りの節はシャクヘツより持運び、下りの節はト
カチより持越なりと。此処後ろに夷人小屋の跡有。
昔六軒有しと聞。

チカホヤニ

コンブカルウス

此処よりまた山道。是も文化度切開の由。其迄は
風波の暇を見て下道を通りし由也。爰も昔しは七
八軒有しとかや。今はなし。

クマ子ヒリ

此所へ下る。此処も昔し二軒有しと。今は無。

トカチ

川中武丁程有。川東に小休所一棟（八坪）有。其
外茅葺假屋多し。後ろの方川番小屋三軒（イカン
テハ家内四人、コンハラ家内七人、カンナムツ家
内五人）有。此川 鮭・鱒・チライ・鮠・鰻・雑
喉・シュシヤモ等多し。越て砂浜寄り木多き処し
ばし行て沼の端に出る。

此川少々上り（一里半）ウラホロと云処有。其
より又少しにてヲホツナイ川と合ふ也。依て略す。

ヲヘツコウシ

此処えも老人引越し来り居る由（脇乙名ヲトリ家
内四人）少し上りて、

カンカン

ベツチャリ

此処にて本川と出逢ふ也。又少々にて

タン子ヲタ

当時五軒（シュテシ家内八人、コアテカアイノ家
内七人、エシカトコロ家内八人）内三軒当所に住
し、一軒（カモエヌンカ家内九人）トフマヲカへ
引越、一軒（ウナハヌ家内六人）ヲサウシへ引越
居るよし。又当所えトカチより一軒来り居るも有
よし。扱此カモエヌンカ（五十一才）親父イサル
クマは当年八十三才、母ヤリケは八十才なる由。
またコアテカアイノ（六十二才）の母も八十才に
なる由聞たりける。扱また此川の東

トカチ

の川筋には当時廿五軒（クンテキ家内四人、リノ
シケレ家内六人、コフイ家内五人、ヤンケリ家内
三人、サナシカ家内三人、トナシリキン家内六人、
シ子アチ家内五人、ヤスカル家内六人、チャシノ
サン家内四人、イタキンカ家内六人、カフニセ家
内五人、マカルカル家内三人、イチャリキ家内八
人）、内十六軒当所に住し、外三軒は渡し守に下
り、又一軒（チカフレ家内六人）タン子ヲタ、ま
た二軒（乙名サスカヲク家内四人、シコライ家内
四人）はアエシニウシへ、又一軒ヲヘツコハレへ
引越たると。其内脇乙名ヲトソ父モノクマヲエは
当年八十二才、母ウタルシマツは七十四才、ヤエ
ヌカル母はサ子キリマツは当年八十三才なるよし。

次の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』では次
のとおりである。

タン子ヲタ

左りの方平場、其処小川有。タン子ヲタは、此処
長く砂浜がむかし有りしによって号るとかや。南
岸人家六軒有。是をタン子ヲタ村と云り。

家主エンカトコロ^{トコロ}、妻イカヌフマツ^{マツ}、倅ヌク
レコレハ^{コレハ}、二男ヤヲコタマ^{コタマ}、三男市藏^{市藏}、四
男一人^{一人}、五男一人^{一人}、娘ウナマツ^{マツ}、同マツ子
サン^{サン}等家内九人にて暮しぬ。余此家え当春泊り
しが、其家主エンカトコロは当夏死せしとかや。
倅も二男も三男もだれも未だ浜より返り来らずと
て、後家と子供は我が面を見て、なつかし気に泣
しまゝ、米一升・烟一把遣して出立。其向に
家主コテカアイノ^{アイノ}、妻アハフニ^ニ、母イセンケ
^{センケ}、倅アニトエ^エ、娘ヲシヨロウシ^シ、娘シャク
シマツ^{シマツ}等六人にて暮しぬが、其娘と倅は雇に下
られたり。また其下に家主ウナハヌ^{ハヌ}、妻イコウ
ラ^ラ、母シテムレ^{テムレ}、倅ラカトク^{カトク}、娘一人^{一人}、
娘一人^{一人}、弟サンノ^{サンノ}、妻トエマツ^{マツ}等家内八人
にて暮しぬ。其内家主足弟は雇に下られ居たり。
また少し下りて

家主シトンケレ^{ケレ}、妻ソコツ^{コツ}、父シュラレケ^{ケレ}、
母エベチャロ^{チャロ}、娘一人^{一人}、伯父モ子ア^ア、甥ノ
トン^{トン}等家内七人にて暮しぬが、其内家主と伯父
とは雇に下りたりと。また少し下に

家主イサリクマ^{クマ}、妻ヤリケ^{ケレ}、倅カモエヌン
カ^カ、妻フリカンナ^ナ、孫コエヒラサ^サ、同チャ
リアナ^ナ、孫女カリン子^子、同一人^{一人}等家内八人
にて暮しけるが、極老夫婦に有ける故、それらに

米・烟草等遣しぬ。其家主と孫とは雇に下られたりと、またしばし下りて

家主シ子アテ^(俵)、妻シエヌ^(俵)、母ナンコヤン^(俵)、姉エンラクヌ^(俵)、娘サエニイ^(俵)等家内五人にて暮し、其家主と姉とは雇に下られたりとかや。此辺川巾ひろく凡巾式百間にも及ぶ也。西岸にチャシコツ様の山有也。三丁計も下りて

フシコベツ

左りの方に有。是古川むかし此処え切て有りしと云也。また針位巳午未午巳と転じて行に、五丁計も下にして合したり。また式丁計も過て

ホノタ

右のかた砂原也。其名義ホンノタと云儀也。また針位午未申未午と転ず。ホノタは其岬に成る也。過て凡三四丁にて

ハラウツカ

此辺川巾凡三百間にも成、中に洲二ツ三ツ有る也。其名義は此処瀬なれども舟に乗よきが故に号るとかや。ワ、ウツカと云よし。ワ、は渡ると云事、ウツカは瀬也。此処人家二軒有

家主エチャンテ^(俵)、妻シエアツヘカ^(俵)、倅アキヒチャラ^(俵)、妻ヌムシマツ^(俵)、二男エフレ^(俵)、三男紋吉^(俵)、四男チャウトロ^(俵)等家内七人にて暮し、其内倅夫婦と二男は雇に下られたり。また其隣家主コヤマ^(俵)、妻モ子リキ^(俵)、倅一人^(俵)等家内三人にて暮す。此コヤマは馬士なりけるが、今此処の家は明家となし、ヲホツナイえ下り居る也。また是より河流いよいよ屈曲なしけるを針位未申未午巳辰卯と転じ、凡三四丁にて

タフコライ

右の方小川也。其名義は此上の山に丸小屋を立て、昔し合戦をなしたりと云より号と。また一説には此処右のかた欠崩平有。其上谷地有、依て其谷地水通じ来りて平に滴るが故に其を号るとも云、何れが是なりや、惣て此辺山遠くして平場也。また三四丁も過て針位巳午に向ひ

ヘツチャラ

此処二股也。其川端^(中)何れも百間計、少し左りの方ふかくして広しと思はる。右のかた少しせまくして浅し。此処より右のかた通り、ヲホツナイまでの処は、当春通りしが故に、今度は左り本の川のすじを下らんと、其段申聞し、また爰に此辺の地面をしりしものとして、イチヤンテ^(俵)爺を頼て案内とする也。三四丁針位巳辰に向

て下る。此辺左りの方赤楊・柳の木立原、右茅原平地なり。凡七八丁にて

ホーヌイ

左りの方小川有。其辺り柳原也。ホーヌイとは川筋が屈曲したると云事を以て号るとかや。また七八丁も下るや

アシ子シコム

右のかた野原也。其名義は昔梅の木一本有りしによって号るとか也。其根よりしてまたまた小枝多くわかれて有りしによって依るとか也。此処人家六七軒左り岸に立並びたり。是より下をトカチ村と云り。

家主ソノミケレ^(俵)、妻エトルシ^(俵)、母アンヌル^(俵)、倅シタテムコロ^(俵)、弟ヤレムシ^(俵)、妻カトクヘ^(俵)等家内六人にて暮しぬが、其内弟夫婦は雇に下りたり。また其下に

家主サヌカヲク^(俵)、妻イトム子^(俵)等家内二人暮しけるが、今は夫婦ともに雇に下られて家は明家となりたり。またしばし下りて

家主ヤンケソ^(俵)、妻チヨリキ^(俵)、倅エアンカエ^(俵)、二男一人^(俵)等家内四人にて暮し、其内家主は雇に下られたり。また其下に

家主シコライ^(俵)、妻チャレカ^(俵)、倅イカシテ^(俵)、妻ヲクヌレ^(俵)等家内四人にて暮し、其倅夫婦は雇に下られたり。またしばし下りて

家主トヒナエテ^(俵)、妻ハルムニ^(俵)、倅カンラク^(俵)、妻ミツホアン^(俵)、兄シヤハエンクル^(俵)、妹コンツノミ^(俵)等家内六人にて暮しぬ。実に其長寿の如。此揃ことめづらしといへるなり。また少し下りて

家主トナシリキン^(俵)、妻ニエコロ^(俵)、祖母アシキリマツ^(俵)、母イカツケマツ^(俵)、妹エンカルマツ^(俵)等家内四人にて暮しぬが、其家主夫婦は雇に下られたり。また是よりして

針位巳辰卯の方に向て、兩岸平地の処を下ること凡そ七八丁にして

クツタラ

右の方小川有、其上平地也。此川口には虎杖多きよりして号るなり。またしばし過て針位巳午巳辰卯寅と転じて

ヌタベト

右のかた小川。其名義はのた計の処なるが故に号る也。また是より式丁斗も下り左りに

無名の小川

また七八丁も下るや此辺一面の平地蘆荻原多し。
此処に人家三四軒有、是をウラホロフトと云也。
家主チカフシ^ヲ、妻ムコト^ン等家内四人にて暮しけるが、夫婦ともに雇に下られたりと。又其隣
家主サナシカ^ヲ、妻エチヤルシ^ヲ、倅一人^ニ、伯
父フエコチシ^ヲ等家内四人にて暮しけるが、家主
は雇に下られたり。また其隣

家主コンラバ^ヲ、妻ソウトエカ^ヲ、倅惣吉^ヲ、娘
カフコテレケ^ヲ、同一人^ニ等家内五人にて暮しけ
るが、其家主は雇に下られたり。

此辺一面の平地、其左右とも小川数条蘆荻原の中
え切込て、川渥流にしてふかし。左りの方

ウラホロフト

是ウラホロ川すじの川口也。当トカチ第六番目の
支流。其名義は不解也。川ふかくして川巾凡十式
三間。川すじの大略を聞ま、志るし置ば、七八丁
を過て右のかたに小川

ヤセシケウシ

本名ヤソシケウシのよし也。網曳揚の義なり。ま
たしばしを過て

チトエウシ

右のかた小川。其名義は此川すじにチエトイ有る
よりして号しと。本名チエトイウシのよし也。此
辺左り平低の地にして、右のかたトカチの川東往
来のうしろえ切込候よし也。また少し上りて

ユヘタロ

右のかた小川。其本名ユヘタヲロの訛りなり、ユ
ヘはユウベにして潜竜沙魚のこと也。タは取る義、
ヲロとは多しと云儀也。またしばし過て

コヌブシ

右のかた小川也。其名義本名はコムヌウシの転じ
たるなり。則榎柏多きと云儀也。またしばし過て

チベカルシヌフ

右のかた少しの野原也。其本名はチツフカリウシ
ヌフと云り。舟を作る事多き野原の義なり。また
しばし過て

シタコロベ

左りの方大川也。此名義不解の由。其川を入れるこ
と凡七八丁にして

イクレ

是右のかた本川との間の^{（く）}のた也。またしばし過
て

チヤウトル

左りの方小川。其名義は不解也。またしばしを

過て

タンタカ

右のかた小川。其名義不解。またしばしにて

ホンシタコロハ

右のかたに有。是より本川は左りえ入込也。其
後ろはヤーラと合して、テレケフの川すじと向背
する也。尚くわしき事は留辺之辺志に志るして略
しえ。

扱其辺より追々兩岸平山有りて、さしての樹木も
無れども榎柏多し。しばし過て

トウブツ

右のかた小川。其川すじ巾三四間、上に行て沼有、
よって号也。沼の口と云事也。またしばし過て

ヤーチノタフ

右のかた二ツの野^{（ノ）}太^{（タフ）}不也。此辺川流屈曲たる其岬
也。また向ふに

トイノタフ

左りの方一ツの岬有。其上平地。トイノタフとは
昔し畑の有りし出岬の原と云義。此辺河流屈曲甚
し。またしばし過て

ビバウシ

右のかた小川也。ヒハとは蚌の事也。此見多きよ
りして号しもの也。また少し上り

セヨベツ

右のかた小川。此川にも蚌多きよりして号。セヨ
とは貝の事也。下にビバ有る故に、上の川はセヨ
と改て号しもの也。またしばし過て

キナチャウシナイ

左りの方小川。其名義は草原なるが故に号る也。
此草は土人数ものに編ものなり。またしばし過て

フンカラタイホ

右のかた小川也。其上の岡に葡萄並に榎桃等多
き処なる故に号。フンカとは右等の如く輪になる
蔓もの多き義なる故に号る也。またしばし過て

ウベツトン子フ

右のかた小川。其名義不解也。またしばし過て

テーシュン

左りの方小川。小石急流也。其本名はテーツシウ
シと云なり。テツシとは魚を取る筈の如き仕懸の
者也。此川すじテツシをウラホロフトの土人等上
りて多く懸るが故に号しものと云也。又しばし過
て

ヲシマルベ

左りの方小川。其名義不解也。またしばしを過て

イククツシナイ

左りの方小川。本名はユツククツシナイと云由。
またしばし過て

サリキシヨマナイ

左りの方小山の間の小川。其川端蘆荻多く有るよりして号しもの也。またしばし過て

ヲホンナイ

右のかた小川。其名義不解也。またしばし過て

フウレシユマモイ

左りの方小川。此小川赤岩峨々たるが湾の如くなりて有る也。依て号。フウレは赤し、シユマは岩。モイはムイの転じ也。則箕の事なり。またしばし過て

ヲタツコムシベ

左りの方小川。其上に一ツの小山有、それを号る也。本名はタツコフウシベツと云也。其小山が有る川と云儀なり。またしばし過て

トコムロ

右のかた相應の川也。其名義は不解也。其左右小川多し。先五六丁も上りて

セタン子ウシヘツ

右のかた小川也。本名セタニウシベツの訛りかと思はる也。セタン子はセタニの訛りにて則鹿梨の事也。また少し上りて

サットコムロ

左りの方小川。此川すじよく乾て有る故に号也。トコムロの枝川いつも乾て有ると云よりして号しなるべし。またしばし

ニンカリ

右の方小川也。ニンカリは恐らくニナカリの転じたるなり。薪取ると云儀也。またしばし過て

トヒルベシベ

右の方小川。本川左りの方に当る也。後ろはチクヘツの源と対立するとかや。くわしくは留辺之辺志に書す。

扱また行るや此辺兩岸峨々たる高山に成、其下に平有。それを

メシヒラ

と云る也。本名恐らくはメウシヒラといえるなり。いつも陰地にして日が当らざると云よりして号るなり。またしばし過て

エサンヌフ

左りの方小川。其傍に一ツの^(ノタフ)のた有る也。依て号。エサンは崩れ落る事を云るなり。またしばし過て

メナシチヒリ

右のかた小川。*其名義不解也。メナシとは東、チヒリとは不解也。只東といへる丈の事のみ解せるなり。またしばし過て

ルウナイ

右のかた小川。其上よりチクベツえ越る道の形代有るよりして号る也。またしばし過て

ワツケツ子ブ

左りの方小川。其名義不解。またしばし行て

シ子フチコロ

右のかた小川也。其名義不解。またしばし上りて

ルーシン

右のかた小川。其名義不解也。またしばし上りて

ヤーラ

左の方相應の川也。其名義不解也。此川すじを五六丁も上りて

モヤーラ**シャーラ**

と二ツに分る也。モヤーラは小さきヤーラの川と云儀。シャーラとは本川也。其うしろはシタコロに合す。尚くわしくは留辺之辺志に志るして略之。

扱此辺に到るや兩岸峨々として、大岩多く有よし。其処を

ウエンチクシ

と云よし。此辺大転石計なる故に其処を水が流れるに急流にしてわろきより号也。ウエンは悪き、チクシは汐瀬の事也。過て

ニセウケ

此処兩岸数十丈峨々たる高壁岩にして、其辺り雜樹陰森。それを過て

ヘテウコヒ

此処二股に成る也。其よりして二川に成り其右のかたなる川を

カバロウ

と云り。其名義は不解也。また其川すじを山間にしばし入りて

モウカハロウ

と云て小川有る也。是小さきカハロウ也と云事。また二股よりして左りの方えさし入る時は

シャマツケウラホロ

是横にウラホロが成りて有るよりして号しもの也。此辺般の木立、少し上に行や柵柏原、其うしろはアシヨロの川すじに当るとか也。尚くわしくは留

辺之辺志に志るせば略_レ之。等はウラホロフトなるハチキアイノ申口也。

扱ウラホロフトよりして十丁計も下るや、遅流にして兩岸蘆荻鬱鬱たる中に

シチ子イ

(左)
右のかた小川也。其名義は少し天気つゞく也干上るが故に号るとか也。此処人家三軒有

家主ヤヌカル_ヲ、女房ウラシコロ_ヲ、倅由造_ヲ、
(伯母)
伯父サ子ツエマツ_ヲ等家内四人にて暮しけるが、
伯父は極老なる故烟草一把を遣したり。また其隣
家主イカンチハ_ヲ、妻イモンカシユ_ヲ、倅石松_ヲ、
甥チャンノサン_ヲ、エウレシユ_ヲ、ホアツラン_ヲ
等家内六人にて暮しぬが、其石松並にチャンノサン
の三人は雇に下られたりとか也。

また是より同じく遅流の処しばしを下りて

ヲヘツコウシ

右の方平欠崩なり。上に榎柏原有。其名義は元此
上の高さ処に土人小屋有りしが、雨にて崩落て仕
舞しによって号る也。

此処に土人の家九軒有

家主子ワイ_ヲ、妻タマチャラ_ヲ、倅哥吉_ヲ、二男
セヲツクル_ヲ、三男一人_ヲ等家内五人にて暮し其
内家主は雇に下られたり。また其隣

家主シケアンテ_ヲ、妻フチモノク_ヲ等家内二人に
て暮し、夫婦ともに雇に下られたりとか也。また
其隣

家主タミテキ_ヲ、妻ウサルンケ_ヲ、倅シリトク_ヲ、
二男シンナエチャラ_ヲ、娘アツテキモン_ヲ、娘カ
フコテレケ_ヲ等家内六人にて暮したりけるが、其
内家主と倅は雇に下られたり。また其隣に

家主イタキンカ_ヲ、妻キサラベカ_ヲ、母アンラリ_ヲ、
弟ヌンカシユレ_ヲ、妻ノヌシ_ヲ、姪フツトル_ヲ、
同フツマツ_ヲ等家内七人にて暮したるが、其
内家主夫婦と弟とは雇に下られたりとか也。また
其隣

家主カンナムツ_ヲ、妻モンカヌ_ヲ、弟ニナヌカル_ヲ、
妻シクサ_ヲ、弟トエカシコロ_ヲ、弟ラツアイ
ノ_ヲ等家内六人にて暮し、其内家主と弟等三人等
は雇に下られ、家に母と妻と弟嫁と残り居るとか
也。また其隣

家主マカヌカル_ヲ、妻イルトエカ_ヲ、弟ハテキニ
セ_ヲ、妻ヤレカツ_ヲ、姉コエラチ_ヲ等家内五人に
て暮したりけるが、其内家主と弟夫婦は雇に下ら
れたりとか也。また其隣

家主カブニセ_ヲ、妻ソエケワヌ_ヲ、母サリケ_ヲ、
倅ケフアイノ_ヲ、二男一人_ヲ、娘ヌイマツ_ヲ、娘
一人_ヲ等家内七人にて暮し、其内家主は雇に下ら
れたり。また其隣

家主クルクシ_ヲ、妻トレタク_ヲ、母トイルカ_ヲ、
(イトルカ)
倅シエヘヌ_ヲ、娘ソヘツ_ヲ、弟キモノカル_ヲ、伯
父コチヤヌアイノ_ヲ等家内七人にて暮し、其内家
主と伯父は雇に下られたり。また其処に
当所乙名ヲトワ_ヲ、妻モコレラン_ヲ、父モナクマ
ヲ_ヲ、母ウタルシマツ_ヲ等家内四人にて暮しける
故、爰にて休足す。実に夫婦とも揃ひて長寿の事
如何にも目出度もの成けり。扱是よりまた川ま
下ること七八丁、川いよいよ遅流にして幅いよいよ
ひろし。右のかたに

ヘツモシリ

一ツの島有、蘆荻多く生たり。式丁計も下りて

渡し場

此処川巾は百五十間、馬舟・歩行舟等を以てわた
す。則是トカチフトといへる処なり。海岸は寄り
木多し。其上に小休所蘆屋にて大きく立たり。ま
た其うしろに土人小屋式軒有。此処を渡し守とす。
又大通行等有る時はヲベツコウシより来りてわた
す也。

家主シカマクル_ヲ、妻テコンビ_ヲ、倅シ子サリカ_ヲ、
妻コエベウシ_ヲ、伯父シタクヌカル_ヲ等家内
五人にて暮しぬが、其内倅は雇に遣はされたり。
其隣

家主イチヤリキ_ヲ、妻アハコラン_ヲ、倅カエサン_ヲ、
妻モンコロ_ヲ、孫三之助_ヲ等家内五人にて暮
しぬが、此処毎一ヶ年給代十式貫文にて、二軒に
て相勧め申候。近年一ヶ月五百文ましに成候よし
也。等くわしくは丙辰記行に志るせば略_レ之。
扱此処え下り候てより、ヲホツナイえ出一宿、明
日早く出立の段申渡す。

此度案内土人イソラムえ染形一反・烟草五把・糸
・針、エクレえ染形半反・烟草五把・糸・針等遣
し、酒式弁遣し大儀の段申聞し置候。

1857(安政4)年の『罕有日記』の「比朗治中
之図」中には「ヲニヲツ」・「ヲコツヘイ」・「チ
マホヤ」・「クマコト□」・「トカチ川」・「ト
イトコ」の地名が海岸線に並べられている。

また、1857(安政4)年以降に書かれたと思わ
れる『東西蝦夷場所境取調書上』(松浦武四郎)
には次のような記載が見られる。



Fig. 十 勝 川 下 流 域 (十勝日記)

「此境目往古は今のヲコッへを以て境と定め有之候に付、奥の方江役人共追々通行致し候様に相成に付、チョクヘッえ渡し守を差置不申は不相成様に相成候。然れとも差而漁事も無之候川の事故、クスリ一場所に而差置候事も迷惑、全く両場所土人互に往来も仕候事故、一年交代に渡船仕度と相談に及候処、トカチ川すしの土人は相応に人別も有之候事故、早速承知致候。隔年相勤に相成様に相成候が、当時之処に而境目に相成候由も申立候」

1858(安政5)年の『御組頭奥村季五郎様御廻浦之節当詰合_ニ差上候、トカチ御場所諸書上留』にはトカチ村の脇乙名としてヲトワ、並乙名としてサシカラクの名が挙げられている。

以上、17世紀中葉から幕末に至る約200年間の浦幌町にかかる文書を紐解いてきた。これらは松浦武四郎の紀行などによって明かなように、在地のアイヌに関する史料が少なくない。しかし、文化年間には40あったといわれるコタンが安政2年には31まで減少している。このコタンを経済的に支えたのは山の猟と河の漁であったことは「十一月ヨリ蝦夷人ドモ、山方ハ鹿猟ニ罷り越シ、正月中迄ニ鹿猟仕舞帰村致シ候」(東蝦夷場所ヨリ申上)などの記事により明かであるが幕末から明治期にかけて河川漁業が和人によって規制され、更に狩猟生活の限界もあって次第に崩壊し、他地へ転出した者も少なくない。(浦幌町郷土博物館学芸員)

引用参考文献

榎本守恵(1978)『新広尾町史』1 広尾

北構保男(1983)『1643年アイヌ社会探訪記—フリース船隊航海記録—』東京

君尹彦(1958)「北海道における市街地の発生—十勝郡浦幌町を例として—」『地方史研究』8-2 東京

児玉作左衛門(1971)『明治期日本人類学・先史学史』東京

小林正雄(1960)『帯広市史』帯広

高倉新一郎解説(1971)「松浦竹四郎著東西蝦夷場所境取調書上(その1)」『新しい道史』9-4 札幌

(1978)『竹四郎廻浦日記』下 札幌

寺島敏治(1974)「各炭鉱の採炭」『釧路炭田』釧路

松浦武四郎(1985)『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』下 札幌

間宮不二雄(1947)『浦幌村五十年沿革史』浦幌

山口菊雄(1971)『浦幌町史』浦幌

1987年3月16日 印刷

1987年3月20日 発行

編集 後 藤 秀 彦

発行責任者 木 村 旭

発行所 浦幌町郷土博物館

北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1

印刷所 大同出版紙業株式会社

北海道帯広市西7条南6丁目